

「圧延技術の進歩」特集号編集にあたって

わが国の鉄鋼の生産推移（図1）にみられるように、1972年度の粗鋼9700万tの生産に対して、普通鋼圧延製品の合計をみても7300万tを越えており、圧延技術は鉄鋼生産技術に占める量的な面からきわめて大きい比重をもっている。また、圧延によつては最終製品が得られることを考えれば質的にも重要な位置にあることも明らかである。

1951年および54年に始められた鉄鋼第一次および第二次合理化計画の実施によつて、戦後の潰滅状態をようやく脱したわが国の鉄鋼業界には、先進諸国から新鋭設備の導入によつて近代化が行なわれ、今日みられる鉄鋼技術の進歩の歴史がはじまつたものといふことができよう。すなわち、現在の鉄鋼技術の進歩に関してはおよそ3つの時期に分けることができるであろう。第1の時期は上記の合理化計画にもとづく新鋭設備の導入の時代であり、1951年より1960年頃までがこれに相当している。第2の時期は1965年頃までにわたる、新鋭設備の使いこなしの時代ともいふべき期間である。引続く第3の時期は、1967年頃にはじまり、それまでの経験を基盤とした、ようやくにしておとずれた主として国産の技術による新鋭設備の建設ならびにこれによる生産の時代を迎えるに至つた時代である。これらの発展の時期に対する生産量をみると、第2の時期の終りにおける圧延製品は約3000万t/年程度であつたものが、続くわずか5年そこそこの間に約7500万t/年という飛躍的な増大を記録するに至つている。

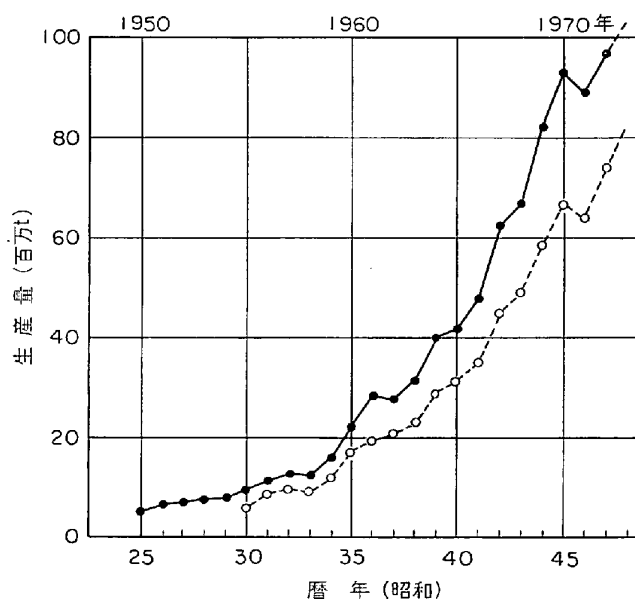


図1 本邦鉄鋼生産量推移（歴年）
実線：粗鋼，点線：普通鋼圧延鋼材

とくに最近建設された設備はそのレイアウト、運搬設備を含めた付属設備、ならびに主要設備である圧延機およびその制御機器の進歩など、いずれを取りあげてみてもまことにめざましいものがあり、10年まえに建設された設備ですでに旧式化したものもあり、感慨にたえないものがある。大型化、高速化、高精度化、省力化などを主眼として進歩をとげた設備面におけることからだけでなく、高品質化という面の進歩についても注目しなければならない。しかし、すでに「鉄と鋼」においては、コントロール・ローリングを中心とした非調質高張力鋼の進歩特集号がまとめられたので、今回、設備面の進歩を記録に残しておくことが意義深いものがあるであろうと考えて、この特集号を計画したしだいである。それは最近における歩進が上述したように、主としてわが国の技術による新鋭設備の建設であり、それを支えたものが経営、企画、建設の各部門の優秀性によることはもちろん、この時代の経験はわが国の関連工業技術全般にわたつた画期的なことからであり、さらには運転、操業における豊富にして優秀なオペレータとの緊密な協同作業にあつたことも見逃してはならないことである。いわばわが国の全体の工業レベルの発展を誇示してよいできごとであると考えられる。

幸にして、この時期の進歩発展に主導的役割を果たされたすぐれた執筆者のご協力を得て、簡潔な記述のなかに豊富な内容を盛り込んでいただいたことは、企画に当つたわれわれの望外の喜びである。

わが国の経済はすでに量の拡大の時代を終えて、質の向上への転換の時代に入つたともいわれるが、すでに世界の一流の水準に達した圧延技術における本特集号に収録されている壮大な設備は外国の先進技術をもとにして発展してきたものがまだかなりの率を占めているものと思われる。将来真に日本人の発明による新しい技術によつて建設された設備が、大部分を占める日が一日も早く到来するよう希願するものである。

担当編集委員	赤 松 泰 輔
	阪 部 喜代三
	中 村 正 久
	吉 谷 豊